

イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第十三巻 オス犬のお仕置き

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 校庭に全裸放置

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ サイドストーリー 『イケメン教師の受
難 伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報
そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「イケメン教師の受難 伝説の水泳大会篇」

第十三巻 オス犬のお仕置き」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー)により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

い。

■ まえがき

体育教師の邪な企みにより、体操着姿の生徒達が見守る中、校庭に置かれた朝礼台の上で屈辱のショーを披露する羽目になったイケメン教師の三神真琴。

やがて、授業の終了を告げるチャイムが校庭に鳴り響くと、生徒達はサッサと教室へと戻り、体育教師にまで見捨てられた真琴は糸纏わぬ姿のまま校庭に一人取り残されてしまった。

程なくして、校庭の隅に隠れるイケメン教師の元に近づいてくる足音が聞こえ、怯える真琴の前にベテラン男性教師が現れる。

水泳大会で運営責任者を務めていたベテラン男性教師は、校庭の隅に佇む全裸のイケメン教師を見つけると怒鳴り声を上げて近づき、その逞しい肉体を舐め回すように見つめた。

「昨日の水泳大会といい、君は本当にどうし

ようもない変態教師だな」

腕組みしながら呆れた表情を浮かべるベテラ

ン男性教師。
実は、彼は体育教師から真琴が校庭に全裸
放置されていることを聞いて、ここにやって
来たのだった。
「三神先生、そんなに裸でいたいなら、これ
から君が学校にいる時にはいつも裸でいられ
るように、今度教職員会で提案してやろう」
ベテラン男性教師は羞恥に咽ぶ真琴を精神的
にいたぶり、お仕置きをすると言って校舎内
へ強引に連れて行く。
やがて、校舎の廊下を素っ裸で歩かされた
真琴が連れてこられたのは講堂のステージだ
った。ベテラン男性教師にステージ中央に置
かれた演台の上に座るよう指示された真琴は
仕方なく演台の上に昇り、あろうことか大腿
開きの恰好で両脚を演台に拘束され、両手も
体の後ろで縛られてしまう。
「それでは、これから君にはとっておきの罰
を受けてもらうから覚悟するんだな」

ベテラン男性教師はそう告げると、演台の上
に真琴を緊縛放置したままステージの裏手へ
と消えていき・・・。
それから暫くして、真琴の目の前で突然、
講堂にある三箇所の扉が開き、それぞれの扉
から制服姿の生徒達が雪崩のように入って来
たのだった。

■ 第一章 校庭に全裸放置

高校の校庭には眩しいほどの太陽の光が降り注いでいた。そしてその光は校庭に置かれた朝礼台をまるでスポットライトのように明るく照らし出していた。朝礼台の上にはついでにこないだまで学園のアイドル的存在であつたイケメン教師の三神真琴が立っていた。その顔には恍惚とした表情を浮かべ、朝礼台を取り囲む体操着姿の生徒達をぼんやりと見つめていた。先輩体育教師の邪な企みにより、性について野外実習という名目の元に生徒達の前でオ○ニ丨を披露することになった真琴は、朝礼台の上で幾度となく果て、その周りには大量の白濁の汁が飛び散っていた。最初は興奮した様子でイケメン教師のオ○ニ丨ショーを鑑賞していた生徒達は、何度も観ている間に飽きてしまったのか、再び射精したイケメン教師にすっかり呆れ果て、もは

や軽蔑を通り越して哀れみの眼差しを向けていたのだった。するとちょうどその時、授業の終了を告げるチャイムが校庭に鳴り響いた。イケメン教師を徹底的に辱めた体育教師は満足そうな表情を浮かべ、生徒達に向かって特別授業の終了を告げた。――みんな、今日の特別授業の事については、他のクラスの生徒や先生達には絶対に口外しないように！そんな事をしたら、もう二度とこの露出狂のド変態教師を使って特別授業がでなくなるからな（笑）――

体育教師が最後に意味深な笑みを浮かべながらそう釘を刺すと、それを聞いた生徒達も同じように微笑み、頷いた。

そうして、体操着姿の生徒達は足早に校庭を去り、真琴は体育教師と二人きりになった。――三神先生、今日の事は黙っておいてやるから、また特別授業をよろしく頼むぞ！――

体育教師はそう言い残すと、真琴を一人朝礼

台に残して、生徒達の後を追うように校舎の方へ駆けて行った。
素っ裸のまま朝礼台の上に一人取り残された真琴は、暫し恍惚とした表情を浮かべたまま快感の余韻に浸っていた。それから暫くして、今度は校庭に授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響くと、真琴はようやく快感の余韻から覚め、自分の置かれたおぞましい現実を知ることになった。
ああっ、どうしよう・・・。真琴は慌てて朝礼台から降りると、両手で剥き出しの股間を隠し途方に暮れた。幸い、校庭には誰も居なかつたが、このままずっと素っ裸で校庭にいるわけにはいかず、真琴はこれからどうすれば良いか必死に考えた。
授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響いてから十分以上が過ぎた頃、校庭の隅に佇む真琴の元に近づいてくる足音が聞こえた。ああっ、誰か来る・・・。真琴は両手で股間をしっかりと隠しながら思わず身構えた。

「三神先生、そんな所で何をしているんだ！突然、校庭に男性の大きな怒鳴り声が響き渡り、驚いた真琴が声のする方を振り向くと、なんとそこにはベテラン男性教師が立っていた。たのだった。」

そのベテラン男性教師は昨日行われた水泳大会の運営責任者であり、真琴のクラスの生徒の相葉達と結託して若いイケメン教師を全校生徒の前で辱めた張本人であつた。

「ああっ、これは・・・」

一番見つかりたくない相手に見つかってしまった真琴は、必死に言い訳を考えたが、何と説明すれば良いか分からず、ただ股間を隠して震えるだけだった。

「三神先生、そんな恰好で校庭に立っているなんて、君は何を考えているんだ！」

真琴の目の前までやって来たベテラン男性教師はさらに大きな怒鳴り声を上げ、イケメン教師の逞しい裸身を舐め回すように見つめた。

素っ裸の真琴には返す言葉もなく、ベテラ

ン男性教師の視姦にただじつと耐えるしかな
かった。
「昨日の水泳大会といい、君は本当にどうし
ようもない変態教師だな」
ベテラン男性教師は呆れたようにそう吐き捨
てると、腕組みしながら暫し羞恥に咽ぶイケ
メン教師の姿を眺めた。
実は、ベテラン男性教師はさっきの体育教
師から、真琴が素っ裸で校庭に放置されてい
る話を聞かされてここへやって来たのだった
ベテラン男性教師には、イケメン教師がどう
ぜクラスの生徒達に悪戯されて校庭に素っ裸
で放置されたのだろうと察しは付いていたが、
真琴を辱めるために敢えて驚いたフリをして
いたのだ。
「三神先生、そんなに裸でいたいなら、これ
から君が学校にいる時にはいつも裸でいられ
るように、今度教職員会で提案してやろう」
ベテラン男性教師がそう告げると、真琴の表
情はさらに強張った。

教師が校内を裸でうろつくなど到底考えられない事で、提案したところで議論する余地などあるはずがなかった。しかし、教職員の中で強い立場にあるベテラン男性教師ならそれをやりかねない気がして、真琴は恐くて堪らなかつた。

「三神先生、とりあえずそんな所にスッポンポンでいてもらつては困る。君にお仕置きをしてやるから私に付いて来るんだ！」

ベテラン男性教師はそう言うのと、校舎の方に向かつて歩き出し、真琴に付いてくるよう促した。

真琴は一体どんなお仕置きをされるのか分からず、恐くて仕方なかったが、ここでベテラン男性教師に付いて行かなければ永遠に校庭に放置されるような気がして、やむなく後を付いて歩いた。

校舎内に入ったベテラン男性教師は、全校集会などで使われる講堂の方に向かつて進んだ。一体自分を何処へ連れて行くつもりなん

だ・・・。後を付いて歩く真琴は剥き出しの股間を両手でしつかりと隠しながら恥ずかしそうに校舎の廊下を歩いた。

やがて、講堂の扉を開け中に入ったベテラン男性教師は、講堂の前方にあるステージの方に真琴を導いた。一体何をするつもりなん

だ・・・。講堂のステージに素っ裸で上がつた真琴は、どうしようもない羞恥が込み上げ

てくるのを感じた。この場所は全校集会の時などに教師が立って講話をする場所、真琴も今までに何度かここで話をした事があった

そんな神聖な場所に真琴は今素っ裸で立ち観覧席には誰も座っていないなかったが、まるで全校生徒に見られているような錯覚を抱き、軽い目眩を覚えた。

「三神先生、それではこの上に座りなさい」

ベテラン男性教師はステージ中央に置かれた演台を指差し、そう告げた。

「えっ・・・」

真琴にはベテラン男性教師が何をしようとしていたのか全く分からず、思わず驚きの声を漏らした。

演台は朝礼台と違ってかなり小さく、真琴が座るにはギリギリの大きさであつた。どうしてこんな所に座らせようとするんだ・・・。

真琴にはベテラン男性教師の意図が分からず、なかなか演台の上に座る勇気が湧かなかつた。

「三神先生、私の命令に従えないのか！それなら君が校庭に素っ裸で立っていた事を教職員会で報告するぞ！」

ベテラン男性教師はさっきの体育教師と同じフレーズで真琴を脅迫した。

「そんな・・・」

再び同僚教師から脅迫された真琴は、絶望の淵に立たされたような気分だつた。

もはや生徒だけでなく教師達までもが自分を辱めようとする敵で、この学園の中に安らげる場所など何処にも存在しない事を真琴は改めて思い知らされた気がした。

「さあ、どうするんだ？」
ベテラン男性教師が決断を迫ると、真琴はもう覚悟を決めるしかなかった。
両手を股間から離れた真琴は、その手を演台に付けてゆつくりと昇っていった。素っ裸のイケメン教師が講堂のステージに置かれた演台に必死に昇ろうとする姿は何とも滑稽でベテラン男性教師は笑いを堪えるのに必死だった。
真琴がどうか素っ裸で演台の上に立つとベテラン男性教師はさらなる命令を告げた。
「そこに座って足を広げるんだ！」
思わぬ命令に真琴は戸惑いながらも、仕方なく演台の上に座ると、両足をゆつくりと左右に開いていった。
「もつと左右に広げるんだ！」
ベテラン男性教師は容赦なくそう命じ、真琴は演台の両端に左右の足首が触れるまで股を開くことになり、股間のど真ん中で大きく膨

らんだイチモツがより強調されることになっ
た。
「それじゃあ、そのままじっとしているんだ
ぞ！」
ベテラン男性教師はそう言うのと、ズボンのポ
ケットに忍ばせていた細いロープを取り出し
それで真琴の両足首を演台に縛り付けていつ
た。
「ああっ、何をするんですか、やめてくださ
い！」
再び拘束されることを恐れた真琴は必死に抵
抗しようとしたが、ベテラン男性教師に一喝
されるとすぐに大人しくなり、結果、真琴は
演台に全裸大股開きの恰好で拘束されること
になったのだった。

■ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 連載小説『イケメン教師の受難伝説
の運動会篇』や最新作の出版情報、そのほか
各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『イケメン教師の受難 伝説の運動会篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195>

・ ・ ・ 二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドルの存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罾に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステータジ上で罨に嵌められ大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事ランプリを受賞した春輝はセレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステータジ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることになった。

り・・・。
後日、早速授業中の大教室で撮影をするこ
とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命
じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏
わぬ姿でポーズを披露する。
そうして撮影はだんだんエスカレートして
いき、イケメン学生は授業中の大教室だけで
なく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄
を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。かつてはやかたつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 ― 体で償う屈辱のクレーム ― 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。

取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現
れ・・・。
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈
辱的な命令を突き付ける。
社長としてのプライドだけでなく、一人の
人間としての尊厳までも奪われるような命令
に聖哉は憤りを覚えずにはいられなかったが
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地
獄へと堕ちていくのだった。